

學會彙報

眞宗學會

一、研究室再整備後の紛失圖書の回収は仲々思ふ様に成果があらぬ。切に先輩諸氏の御協力を望んでやまない。反面學生の研究態度は至極平靜にして、學會の活動も昨年に比し極めて旺盛であつた。來學年は又一段と飛躍を試みるべく目下種々の事業が計畫されてある。

一、學務部長稻葉秀賢氏はその兼任を辭退され專任學部教授に就任された。研三西道昌云兄は今回復學疊變教學の研鑽に餘念がない。かくして研究室も漸く舊に復しその將來は待つあるものあらんか。

一、本學期に於ける學會の動き左の如し
イ、例 會

十二月八日 木曜日 於第九教室

講師 松原祐善助教授

講題 本願に於ける唯除の問題

出席者 名畑、稻葉教授

研究室、立花、草間、外學生二十名

寺田、坂本助教授

二月二日 木曜日 於第九教室

講師 日野環專門教授

講題 第十八願加減之文に就いて
出席者 名畑教授、松原助教授

研究室、立花、草間、太田、西道、外學生十五名

ロ、論註輪讀會

指導 稻葉秀賢教授

二月九日 木曜日 於研究室

擔當 立花徳眼 出席者 草間、西道

二月十六日 木曜日

擔當 立花徳眼 出席者 草間、西道

二月二十四日 金曜日

擔當 草間文秀 出席者 立花、西道

ハ、公開講演會

二月十一日 土曜日 於第一教室

講師 京大助教授 武内義範氏

講題 教行信證に於ける行の概念

出席者 名畑、松原、日野、山口、坂本、横山、寺田、岸

各教授、助教授、講師 研究室 立花、草間、西道、

學生 約百十數名

午後三時會場を會議室に移し午後五時過ぎまで討論が續けられ教行信證の主體的な把握に就いて大いに啓發される處があつた。

(二五、二、二八 立花記)

佛教學會

本年度頭初に於て新しく發足した佛教學會も一年を迎へた。

學會の綜合から學問の綜合的研究を希求した本學會は、猶今後にその飛躍を俟たねばならぬ素因を藏してゐる。その一つに佛敎學研究の在り方といふ根本的な課題が擧げられるであらう。

若し佛敎を支那、印度等の枠内に閉じこめて佛敎學研究を指向するならば、本佛敎學會の使命達成も覺束ないと言はねばなるまい。過去一年間の本學會の歩みを顧る時、猶そこに何らかの殘滓が在るかに考へられる。それには本學會運営上の問題もあるが、會員の間に無意識の意識が潜在してゐるのではなからうか？ 印度から支那、日本へと傳承してきた佛敎が、假令、そこに思想上の表現形式の相違ありとしても、齊しく大聖釋尊の覺證に裏付けられた思想的展開の所産に他ならない。その思想的背景を忘却して一小事に拘泥するならば、又何を可言はんやである。

新學年度に於ては、本學會に稍もすれば生じがちな小兒癡癡的な見解を捨てて佛敎學會本來の歩みを續けられんことを期するものである。

◆例會

時 十二月九日三時

所 本學會議室

發表者 特別研究生 濱田耕生氏

題 目 三論宗の二諦説と般若説

出席者 山口、山田、横超各教授、安井講師

研究室 雲井、長谷岡、學生七名

◆卒業生送別例會

時 三月四日午後二時

所 佛願寺

當日は卒業生送別の學會として開催されたのであるが、前日來御不快の會長山口益教授が缺席の止むなきに至つたことは残念であつた。先づ、山田、横超兩教授より卒業論文に關して示唆に富む全般的な批評があり、特に今回の卒業論文が、漸次舊態に復しつゝあつたとの總評を受けたことは喜ばしき現象である。次いで、西本、林兩卒業生より論文に就ての感想があり、終つて釈穀邸庭園に於て一同記念撮影後、終始和やかな座談の裡に午後五時過ぎ閉會す。

因みに本學會は今年度十名の卒業生を送ることとなつた。然し當日は僅か二名の出席を見たに過ぎず、種々の事情があつたにせよ、卒業生送別の學會としては些か淋しいことであつた。

當日出席者 山田、横超兩助教授、佐々木(教)講師

研究室 雲井、長谷岡、研究科 櫻部、卒業生 西本、林、學生約二十五名

佛敎史學會

(一) 雲華院師百回忌記念講演及遺墨展

昭和二十四年十二月三日(土) 九時—四時 於會議室・講堂

雲華院大舍講師 (A.D 1773-1850) 百回忌にあたり學德及文人・墨客との交遊の蹟を偲びその記念講演並遺墨百數十點の

展觀（九時—四時於會議室）を行ふ。

一時より講堂に於て學長導師の下に法要、續いて左の講演あり。

一、頼山陽と雲華 大阪市立大學 神田喜一郎教授
一、雲華院の行蹟を偲びて 本學 日下無倫教授

講演終了後茶話會を開催、當日は内外多數の參列を得て頗る盛會であつた。

(二) 論文發表會

二月九日（木）三時 於第八教室

卒業生諸君の論文についての發表あり。

出席者 日下、名畑教授、龜淵助手、北西副手、細川先輩、

學生十三名。

引續き七時より大谷派山科別院に於て卒業生送別會を開催す。

（堀尾記）

東洋史學會支那學會

○中國文化同好會第十七回例會 昭和二十四年十二月十五日

於會議室

公開講演

「中國古代の宗教」

京都大學人文科學研究所長 貝塚茂樹氏

○第十八回例會 昭和二十五年二月十八日 於紫明會館

卒業論文發表會並豫餞會

先づ支那學專攻四君の卒業論文の發表があつた。論題

莊子の思想とその諸家との交渉

李屏山の傳とその思想

今古奇觀の研究

白樂天の思想と文學の交渉について

次いで神田講師と木村講師が論文の批評と中國學の所感を述べられ、記念撮影の後、豫餞會に移る。出席者は二講師の他に

宮崎講師及び本學の野上部長、中田助教授、水谷豫科教授、畑

中助手、察見副手、卒業生の大屋學士、間野學士、學生の東洋

史學專攻、大野、太田、近藤、名畑、支那學專攻、多屋、米田、

垣内、北村、坂田、宮尾、宮城の諸氏。本會としては近年稀な

盛會。歡談謳吟時を過し、和氣霽々裡に散會した。

中國古代の宗教

京大人文科學
研究所長文庫

貝塚茂樹氏

中國古代の宗教思想について私の考へを述べるのであるが、こゝに宗教といふのは儒教のことを指して言ふのである。儒教を宗教と言つてよいかどうかは別問題とする。こゝに私の述べようとする古代の宗教思想は儒教の起源と非常に深い關係があるものである。そこで、先づ儒教は中國の思想としてどういふものであるかと言ふことから述べよう。

儒教が古代の宗教から獨立して學問となつたのは、大體BC六〇〇年頃であるが、この頃の儒教は漠然としてゐて、組織もなければ教團もなかつた。即ち、社會的信仰宗教と言ふべきも